書　評

Value: The Representation of Labour in Capitalism.
Essays edited by DIANE ELSON.
CSE Books, London, 1979. Pp. v+*180*.

佐　藤　公　俊

目　　次

1. 本書の構成
2. ダイアン・エルソンの価値労働論
3. 結びにかえて

1. 本書の構成

欧米における最近のマルクス経済学研究の進展には著しいものがあるが，そこでの理論的問題関心の焦点は，いわゆる「転形問題」からマルクスの価値論自体を対象とするものに移っている。こうした状況のなかで，ネオ・リカーディアンからのものを含めて様々の理論的成果が生まれているが，とりわけ，小稿で紹介する *Value* は，包括的にマルクス価値論の諸論点を扱っている点で，そうした諸成果の一つのピークをなすといってよい。本書はマルクス価値論が社会主義の基礎であるという共通認識の下に，そこにおける「分析の方法」の解明を意図した論文集であって，執筆者達は全て CSE (The Conference of Socialist Economists: 社会主義的経済学者会議）の構成員であるが，各人の理論的立場はマルクシアン，ポスト・アルチュセーリアン，ルービンの影響の強い者，宇野学派と多岐にわたる。かくて，本書の中に展開されている諸論点は，正統的・教条的にでなく，新鮮かつ多彩な扱いを受けることになったけれども，上述の意図の達成度は必ずしも高いといえないように思われる。

とりあえず，各論文の執筆者名と題名と内容とを簡単にみてゆけば，冒頭の Aboo Aumeeruddy と Ramon Tortajada との Reading Marx on Value: A Note on the Basic Texts では，古典派経済学を継承・深化させている側面と，それを放棄しそれから離脱している側面とがマルクスの諸文献に併存することが示され，とりわけ，マルクスの体系とリカードゥ経済学との複雑な継承関係が検討されている。二番目の，Jairus Banaji による From the Commodity to Capital: Hegel's Dialectic in Marx's *Capital* の中では，マルクスの価値論とヘーゲルの弁証法との関係が検討され，結論的に，マルクス価値論の対象を単純商品生産という前資本主義的生産様式とすることは誤りであって，むしろ，『資本論』の冒頭から資本主義的生産様式が前提されているとしなければならないと論じられている。かくて，『資本論』冒頭の価値論は，商品を分析して「社会的労働の抽象的・物象的形態」としての価値概念を抽出する「分析の局面」と，価値から商品という現象次元に回帰する「総合の局面」とによって構成される，と特徴づけられることになる。

第三論文は Geoffrey Kay の Why Labour is the starting point of Capital である。そのなかで，ベーム＝バヴェルクのマルクス批判，つまり，諸商品の相対価値どおりに諸商品が交換されなければならないと解された場合のマルクス価値論が「形式主義的」であるという批判は正当であるとしても，ベーム＝バヴェルクのこの解釈自体がマルクスの抽象方法の誤解にもとづいていると批判したうえで，Kay は，価値と価格との乖離が『資本論』冒頭からの価値論の本質的特徴であるといういみの主張をしている。第四の，Chris Arthur 執筆の Dialectic of the Value-Form は価値形態論を考察対象としている。そのさい，『資本論』第一部冒頭の商品論第三節の〈価値形態または交換価値〉が欧米では通常無視されているけれども，それはマルクスの叙述方法を形式的にしかみていないからであって，第三節にみられる弁証法的論理によってはじめて諸商品間の交換関係の物質性が解明される，と価値形態論の意義が強調されるのである[1]。

五番目の論文，Athar Hussain の Misreading Marx's Theory of Value: Marx's Marginal Notes on Wagner の中では，アルチュセールの位置づけにしたがって，マ

---

1) くわしくは，拙稿「クリス・アーサーの価値形態論」(『筑波大学　経済学論究』第2号（1982年12月）所収）参照。

ルクスの〈アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注〉が検討されており，ヴァーグナーがマルクス説とリカードゥ説とを区別していないことの考察から，具体的労働と抽象的労働との区別の必要性と後者が資本主義的生産様式に特有なものといえない点とが指摘されている。伊藤誠と横川信治とによる第六論文 Marx's Theory of Market-Value は，日本の市場価値論争を背景に，商品の社会的価値が，諸生産条件によって異なる商品の個別的必要労働時間を平均したものになるというよりもその価値を決定する生産条件が市場競争によって与えられることになるという，宇野理論の命題の意味を展開している。

最後は Diane Elson の The Value Theory of Labour である。このエルソン論文は，上述の諸論文に提起されている諸論点を総括的に扱う位置にあり，じっさい，「分析の方法」の意義を全面的に扱っているといういみで，本書の中心をなす。そこで，項を改めてエルソン論文にやや立ち入って検討を加えることにするけれども，その問題設定・解答形式は価値論の政治的意義は何かというものであって，客観的に評価しづらいことから，女史の審級評価では下位になるとしても，客観的評価の比較的容易な経済学的問題に焦点を絞って考察してゆくことにする。

2、ダイアン・エルソンの価値労働論

本節では，まず，欧米の価値論論争の中でエルソンの問題提起がどのような意義をもつかをみて，つぎに，女史のこの問題解決のための理論的前提を検討し，最後に，女史の所説である価値労働論を簡単に紹介する。以下，*Value* からの引用はページ数だけを示すことにする。

①エルソンによる「労働価値論」批判

最初に，マルクス価値論の基本構造を確認しておくと，その大枠は，『資本論』第一部の第一篇〈商品と貨幣〉から第三篇第五章〈労働過程と価値増殖過程〉にかけて展開されているとみてよいが，それは，形態と実体との関連が商品・貨幣・資本の諸規定の展開に対応して抽象的なものから具体的な諸関係になってゆく点に求められよう[2)]。

---

2) これは，「形態論的規定と実体論的規定との並行的展開」（時永 淑『古典派経済学と「資本論」』，法政大学出版会，194頁）のことであり，やや立ち入ったいいかたを借りれば，「商品・貨幣・資本という流通形態的諸規定を労働実体の疎外態として解明しようとする分析」（同，211頁）である。

ただし，こうした形態と実体との関連は単一の規定で解明できるような単純なものでなく，価値実体論・価値の量規定論・価値形態論・物神性論・社会的均衡編成論・流通形態論などの諸側面をもつものであるが，ここでは行論との関係から価値実体論と価値の量規定論とを簡単に説明しておく。

価値実体論とは，『資本論』冒頭の商品論で，「抽象的人間労働」が「対象化または物質化」されて「価値」になるとして，「抽象的人間労働」が「価値の実体をなしている労働」と規定されていることを中心とする議論である。それは，まず，「交換関係」の「特徴」にもとづき「労働生産物の使用価値」が「捨象」され，ついで，「労働生産物に残る「まぼろしのような対象性」・「無差別な……人間労働力の支出の，ただの凝固物」・「社会的実体の結晶」が「価値——商品価値」と規定され，結論的に，「ある使用価値または財貨が価値をもつのは，ただ抽象的人間労働がそれに対象化または物質化されているから」である，と述べられていることにもとづいている。

マルクスの価値の量規定論とは，「社会的に必要な労働の量」によって「価値量」が「規定」される関連についての議論のことであって，それは，マルクスが，「価値の大きさはどのようにして計られるのか？」という自らの設問に対して，「ある使用価値の価値量を規定するものは，ただ，社会的に必要な労働の量，すなわち，その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間だけである」と解答を与えていることによっている[3]。

さて，以上で簡単に見てきた価値実体論と価値の量規定論との両側面をもつマルクス価値論は，エルソンにいたるまでの欧米の論者たちによってどのように把握されてきたか。このことは，エルソンの問題提起を評価するために不可欠の準備作業と思われるので，かいつまんで諸家の説をみておく。

まず，欧米の正統的な見解を代表しているポール・スウィージーの所説をみれば，スウィージーは，フランツ・ペトリーの論考にしたがって，マルクス価値論を「諸生産物間の量的関係」についての「価値の量的側面の問題」と「生産者間の，特定の歴史的に規定された関係」を考察する「価値の質的側面の問題」[4]とにわけたうえで，『資本論』

---

3) 以上の『資本論』からの引用は，カール・マルクス『資本論』，大月書店，国民文庫版第一分冊76–79頁からのものである。

4) ポール・スウィージー『資本主義発展の理論』，新評論，28頁。

の第一章では「マルクスの量の価値論全体」が展開されているわけでなく，「その重点は……価値の質的側面」に置かれているのであって，「価値の量的側面にかんするかぎり……第一次接近以上に出ようとはしていない」と分析している。この「第一次接近」とは，諸商品がそのおのおのに含まれた社会的必要労働量に比例して相互に交換される，という「命題」[5]の体系的位置を示し，この「命題」自体はマルクスの「価値」概念を「交換価値」と解したうえでの価値の量規定論をいみするのであって，こうした「命題」を含む「価値法則」を展開する「量の価値論」もまた，価値の量規定論を中軸とする価値理論なのである。

スウィージーのこの「第一次接近」説は，ロンルド・ミークやモーリス・ドッブも採るところであって，ミークとドッブは，上述の「命題」の内容を「価値法則」ないし「労働価値論」と呼ぶ点でスウィージーと異なるけれども，マルクスの価値論を質的・量的側面にわけたうえで，量的側面としての「価値法則」ないし「労働価値論」(=「命題」)を「第一次接近」と位置づける点では，スウィージーと同じく価値の量規定論を基軸にすえた理論構成を行っているのである[6]。

むろん，価値の量規定論を中心とする「量の価値論」に対する反論がないわけでなく，ベーム以来様々なものがあるけれども，なかでも，ネオ・リカーディアンとポスト・アルチュセーリアンとからの反論が注目に値いする。

ネオ・リカーディアンを代表するイアン・スティードマンは，「マルクスの価値の大きさの分析」が「資本主義社会の唯物論的解明」にとって「足枷」でしかないことを，「価値の大きさに全く関係なく」「資本主義経済の中心的特徴」である利潤率と生産価格とを決定できることから，「マルクスの価値理論は放棄されなければならない」[7]と主張している。「価値の大きさの分析」とは価値の量規定論のことをいみするといってよいから，スティードマンは価値の量規定論を批判することによってマルクス価値論全体を否定しているのである。

---

5) スウィージー前掲書，54頁。

6) くわしくは，ロンルド・L・ミーク『経済学とイデオロギー』，法政大学出版局，139頁～152頁，および，モーリス・ドッブ『価値と分配の理論』，新評論，176頁～178頁，353頁～354頁，参照。

7) Ian Steedman, *Marx after Sraffa*, New Left Books, London, 1977, p. 205–7.

同様な，しかしより一層ラジカルな反論は，カトラー等のポスト・アルチュセーリアンから行われているのであって，そこでは，「交換されるもの同士に，何の実体的同質性もな」く，また,「等式としての交換」が「理論的条件の産物」にすぎないことから，「交換を等式としてはなら」ず，したがって，「価格と交換価値」とに何の「一般的決定要因」もないと主張される。かくして，「『価値』がこうした一般的決定要因であるとする観念」を批判するための「挑戦」が行われるのであって，それは，「交換価値」の決定論と解された価値の量規定論を批判する根本的な「挑戦」なのである[8)]。

ところで，今までみてきた論争状況に，エルソン女史はどのように斬り込んでいるか。価値の量規定論を軸とした「労働価値論」の批判についてみれば，女史とスティードマンやカトラー等とは共通している。だが，ネオ・リカーディアンの，「商品に具体化された社会的必要労働時間の量」による「均衡価格の決定」論批判は，「それ自体としては，全く正しい」けれども，「価値ではなく，スラッファにもとづく批判こそが余分なもの」なのである。また，カトラー等の，「価値が一般的決定要因であるとする観念」(p. 121) 批判は妥当だが，こうした観念がマルクス価値論にあるとする「観念」も批判されなければならないのであって，問題は，「マルクス価値論の対象が労働」であることを前提に，「何故労働は現に纏っている形態を纏うか」(p. 123) を解明することなのである。

結局，エルソンの問題提起の意味は，マルクス価値論を価値の量規定論でなく価値実体論を主軸として読むことであると思われるのである。

②エルソン説の理論的前提

エルソン女史は，前述した問題を検討するための枠組として，労働と形態との関係を一般的に考察している。

女史の労働論をみると，人間が合目的的な主体性をもつことから，動物の本能による一定の行動様式と対照的に「人間労働は不確定」性をもつのであって，それにもとづく「流動性，潜在力」は「社会的に『固定』ないし客観化されなければならない」(p. 128) とされる。こうした「社会的確定過程」をとおして，労働は「社会的形態」を纏うこと

---

8) Antony Cutler, Barry Hindess, Paul Hirst and Athar Hussain, *Marx's* Capital *and Capitalism Today*, Vol. I, Routledge and Kegan Paul, London, 1977, p. 12–19.

になる。

マルクスやエンゲルスの史的唯物論の方法によると，「社会的形態」の「確定過程」とは「歴史過程」であって，「それは，凝結した形態が，順次，溶解し，また……生起する過程」(p. 140) である。その内部を分析すれば，「形態」は「決定要因」ないし「対立しあう潜勢力が一時凝結したもの」ということになる。

『資本論』について以上の諸関係を具体的にみれば，「潜勢力」は，「歴史上の全ての時代に妥当する」範疇としての，「抽象的労働と具体的労働，社会的労働と私的労働」(p. 144) であって，「マルクスは，あらゆる特定の労働形態が，いずれもこれら四つの労働の側面の凝結したものとみている」(p. 149)。結局，「資本主義の社会関係に特有な」「凝結」方式とは，「労働の抽象的側面の『対象化』ないし『結晶化』」(p. 150) のことであって，それは，まず，価値実体論で解明されなければならないものといってよかろう。

以上要するに，女史の前提的議論は，潜勢力が凝結して形態として現象するという史的唯物論的な社会形態確定の一般原理によって，あらゆる社会に共通するという意味で原則的な労働形態の確定と，特殊資本主義的な，労働の抽象的側面の対象化とを解明しようとする企てであるといってよいだろう。

③価値労働論としてマルクスを読む

自らの積極的主張としてエルソン女史は，前述の一般的な「凝結」が特殊資本主義的に「対象化」となっていることを前提したうえで，それを軸にしてマルクス価値論を「価値労働論」として読んでゆく。「価値労働論」にも諸側面があるが，ここではその基本構造をなす商品論次元の価値実体論と価値形態論との関係をみておこう。

というのも，女史のマルクス価値論解釈の中では，『資本論』における「分析範疇」が「三つ（労働時間，価値，交換価値）」(p. 127) あるとされており，それぞれの要因を関係づけている論理が価値実体論と価値形態論で示されていると思われるからである。

価値実体の定義規定としては，自然科学的な「実体的等価性」の概念が商品という「人間関係の形態」に適用されて，「価値の実体は……商品に具体化された人間的エネルギー」(p. 119) であって，しかも「同質かつ均一」でなければならないことから，「労働の抽象的側面」であると結論が下されている。そこから，価値実体論では，「諸商品は価値＝実体的な等価性として，抽象的労働の体化したもの」(p. 159) とされることになるが，

それにあわせて修正された価値の量規定論では，「流動形態にある化学物質の量が，その物質の結晶体ないしジェリー体の大きさを決定する」のと同様に，社会的必要労働時間量が「価値の大きさを決定する」(p. 133) と主張されることになる。

価値形態論における「対象化」をみれば，「ある商品に具体化された抽象的労働が『対象的に』一つの『物』として表現される」(p. 162) 関係の展開の中に立ち入って，「抽象的労働の対象化の条件を検討し，それが，価値を反映しかつ価値の表現である一般的等価物を含意する，と結論」(p. 164) される。

かくて，価値実体論と価値形態論とをつうじて，「対象化」が，「客観化」のいみを含みつつ，根本的関係であることが示されることによって，上述の三つの要因が，価値実体・価値・価値形態に位置づけられることになるとともに，それらは価値の三層構造を示していると考えられるのである。

3. 結びにかえて

以上概観したエルソンの価値労働論に示されている価値の三層構造論は，マルクスの価値論展開の意図を正当に継承するものと評価できる[9]。だが，それは，マルクスの理論展開とも共通することであるが，社会的形態と労働という実体との直結関係を方法的に前提しているため，一定の偏倚を受けたものとなっている。つまり，そこでは三層構造の規制関係の方向が，不可逆的であるとすれば，労働が決定要因とされるのであって，資本主義における資本という決定要因の位置が不明確なのである。けれども，こうした問題は，原理展開において，形態と実体との規制関係の解明の前提としての形態規定純化の方法と三層構造論との関係のうちに位置づけられて，形態的三層構造論の問題とされねばならないことはいうまでもないが，それは，本稿の課題と紙幅をはるかに超えることである。

---

9) 前掲『資本論』148頁～150頁，および，「アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注」(マルクス・エンゲルス全集，第19巻，大月書店) 参照。